

戦時下のキリスト教学校 ―「青山学院昭和一八年事件」をめぐって―

鈴木 勇一郎

一、はじめに

戦時体制期のキリスト教学校の歴史については、各学校が編纂してきた年史類では多くの場合、国家や軍部による「弾圧と抵抗もしくは妥協」という見方がなされてきました。こうした書籍の中には、あまり学術的とは言えないものも少なくありませんが、立教大学では戦時下における立教学院の歴史についての研究を進め、数年前にその成果を『ミッシェンスクールと戦争』という論文集にまとめています。これは、立教やキリスト教学校だけでなく、戦時下における学校の実態を明らかにする上で、大きな成果であったことは間違いありません。とは言いつても、基本的には「弾圧と抵抗もしくは妥協」という見方自体は、それまでの語りを踏襲しているということができます。もちろんこうした状況があったことは事実です。しかし、その

枠組みだけで戦時下における大学や学校の歴史を語ることはできるのかについては大きな疑問があります。

竹内洋氏が、『大学という病』で、それまで戦時体制下における思想弾圧的色彩で語られてきた平賀肅学を東大経済学部創立以来の派閥抗争の中で位置づけたように、近年この時期における大学の歴史については、再評価も進んできています。

本報告では、私が以前携わっていた青山学院で一九四三年に起こったいわゆる「昭和一八年事件」を再検討し、キリスト教学校における学校運営のあり方をめぐる相克という観点から戦時下におけるキリスト教学校の歴史を見直してみたいと思います。「昭和一八年事件」というのは、当時の院長が複数の教職員に退職を強いる人事異動を行い、それに伴って四月から八月頃まで学内が大きく動揺したという一連の騒動のことを指して便宜上名づけています。

二、日本におけるキリスト教学校と戦時体制

古くからある日本におけるキリスト教学校は、明治時代初期に外国のキリスト教ミッション主導で設立されているところがほとんどです。

しかし、外国ミッションとの関わりは、一様なものではなく、学校や時期によって多様な形態をとってきました。例えば立教は、明治初期以来、昭和初期に至るまでアメリカ聖公会の主導性が非常に強く、そのトップは代々アメリカ宣教師が就任していました。これと対照的なのが同社社で、その設立当初こそアメリカンボードというミッションの力が強かったものの、新島襄の死後は日本人による主導性が強まっていきました。ですからそのトップは戦前においても全て日本人が就任しているわけです。ただその過程で両者の関係性も緊張感をはらんだものとなり、時には強い摩擦が顕在化したのです。

戦前における多くのキリスト教学校は、ミッション主導性が強い立教型と日本人主導性が強い同志社型の間に位置づけることができます。しかし、一九三〇年代以降、外国ミッションは日本への援助を減少させ、各キリスト教学校はミッションからの自立化を図っていくことになりました。これはアメリカのキリスト教会が、日本を含む東洋への伝

道方針を転換させてきたことに、その端緒があったわけですが、その辺りの事情については、大江満氏が先に触れた『ミッションスクールと戦争』の中で詳しく明らかにしています。

さて、アメリカからの資金が先細りとなると、それまでとは異なり日本人だけで資金を調達し、学校を運営していかなくてはならなくなりました。そうすると日本人の中で学校運営をめぐる対立が顕在化していくこととなります。

三、青山学院内での対立の顕在化と笹森順造院長

さて、ここで青山学院の歴史をざっと振り返ってみたいと思います。青山学院は、アメリカのメソジスト監督教会という教派によって派遣されたミッションによって作られたミッションスクールということが出来ます。ただ、立教などとは異なり、同志社ほどではありませんが、どちらかといえば日本人の主導性が明治時代以来強い学校であったということが出来ます。

多くの主要キリスト教学校と同じように、青山学院でも一九一〇年代以降、大学昇格問題とキャンパス整備が大きな課題となってきました。この時期、立教はアメリカ聖公会から大規模な資金援助を得て、それまでの築地から池

袋に移転し、本格的なキャンパス整備を進め、一九二一年には大学令による大学昇格を果たすことになりました。

これに対してアメリカのメソジストという教派は、大規模な割に聖公会のようにには気前がよくなかったようです。仕方がないので、青山学院では、キャンパス整備や大学昇格を図るために、日本人校友を中心とした募金を大々的に行い、着々と準備を進めていきましたが、その過程で日本人の主導性がかなり強まってきていたようです。ところが、こうした学校経営の苦心からか当時の院長は病死し、一九二三年の関東大震災では、大学昇格用に整備した校舎が破損したりして大学計画は見送り、今度はアメリカのメソジスト監督教会から多額の援助を得て、復興事業を進めていくことになりました。

このように青山学院では、外国ミッシヨンの力が強まったり、日本人の主導性が強まったり、時期によってその力関係が何度も変化してきていたわけです。

しかし、そうした関係も一九三〇年代以降、アメリカからの援助が減少していく中で大きく変化していかざるを得ませんでした。こうした中、青山学院に対して資金的なバックアップをし、経営に対する発言力を強めていったのが米山梅吉^①という人物でした。米山は、三井銀行の常務や三井信託の初代社長を務めるなど、三井系の有力財界人です。

史苑（第七一卷第二号）

た。この時期、立教大学に対しても心理学実験室を寄付するなどしていましたが、青山学院の出身者ということもあり、校友会長を務めるなど、学校運営に対する発言力は非常に大きなものとなっていきました。一九三〇年代の青山学院では、再び大学昇格問題などをめぐり、日本人の間で対立が顕在化するようになっていきました。

特に、アメリカ南部に地盤を持つ南メソジスト監督教会系の関西学院が、阪急の小林一三から援助を得て一九三二年に大学昇格を果たすと、青山学院内では焦りが色濃く出てくるようになっていきました。それだけに学内の抗争も深刻なものとなっていったのです。

立教でも一九三〇年代半ば以降、学内での紛争が激しいものとなり、学内から学長の選任ができなくなり、外部から招聘することになりました。こうして誕生したのが一九三七年に就任した遠山郁三学長^②でした。

青山学院でも、学内抗争の激化によって院長を学内から選任することができなくなり、校友会長米山梅吉の主導で一九三九年に青山学院長に就任したのが、笹森順造^③という人物でした。米山は学外から新しい血を入れることによって学内を改革し、停滞する大学昇格計画を再び活性化させることを期待して笹森を招聘しようです。立教大学の学長となった遠山は、東大や東北大の医学部教授を務め

るなど、当時からそれなりに大物でしたので、外部からいきなり連れてきたとしても、ある程度は学内を抑えることができました。ところが、笹森という人物は、戦後は剣道復興の立役者となり、参議院議員や国務大臣を歴任するなど、それなりに大物となっていくのですが、この当時はまだ弘前の東奥義塾という、いかなれば田舎中学の校長にすぎませんでした。それだけに青山学院内での反発は激しいものがあつたようです。その結果、学内の対立はさらに激化するという状況を招いてしまったともいえます。

四、戦時中の大学開設計画とその中止

それでも、笹森院長は一九四二年三月の理事会で、青山学院大学設立案を提案し承認を得るまでにこぎつけます。ここで構想されていた大学案は学部制を採らず、学長の下に直接宗教学、語学、経済学の各専攻を設け、統一的な「全学必修科目」群を設置するなど、教養教育重視型大学の色彩が強いものでした。しかしその後、戦時下においては文科系の大学新設を文部省が認可する見込みが立たないことがわかり、同年九月設立計画は中止されることになりました。しかし、そこに至る過程で大学をめぐる構想の相違というものが顕在化していくことになりました。当時の青山学

院には、神学部、文学部、高等商業学部という専門学校令に基づく三学部がありました。とりわけ高等商業学部教員たちとの対立が激化したようです。当時学部長を務めていた古坂崑城^④という人物は、文学部、経済学部の二学部からなる通常の学部分立型の大学を主張し、笹森の唱える大学構想と厳しく対立しました。

彼ら、一部の教員は学内的にさまざまな動きを示していたようですが、具体的な行動に際して中心的な役割を果たしたと見做されたのが、大木金次郎^⑤という人物でした。一九四三年三月に、笹森院長は古坂崑城を高等商業学部長から更迭しましたが、大木ほか数名の教職員に対しては学

校自体からの退職を強いる人事異動を行いました。

五、大木金次郎教授退職問題

さて、大木といってもピンとこない方がほとんどかと思えます。しかし、戦後一九八〇年代末に至るまでは、青山学院大学学長、青山学院院长、学校法人青山学院理事長など、青山学院における要職を占め続けただけでなく、私立大学審議会会長、私立大学連盟会長など、私立大学界において重要な地位を歴任していった人物です。大木は昭和初期から青山学院で教鞭をとっていましたが、実はこの

一九四三年三月に一度学校を追われているわけです。

このことについては、青山学院の正史である『青山学院九十年史』では、大木に対する思想弾圧的色彩の濃い事件として語られています。

大木教授に対しては、その著書、「経済学の理論と思想の発展」の中にあるマルクス経済学に関する研究の部分だけを全体の研究内容とは関係なく抜き出して、危険思想の持ち主であるという密告が憲兵隊になされ、渋谷警察署と憲兵隊が彼を召喚して嚴重な取調べを行うようなことも起った。(同書四六一頁)

実は本書のこのくだりをよく読むとそこまで断定してはいませんが、前後の文脈からさらっと読み流すと、そういうように読めるような形で書かれています。実際、戦後初期においては、大木自身がこうしたことをはっきり述べていました。

昭和十八年三月、筆者をはじめ四名の教師が突然この学園から追われた追放の理由が少くとも筆者にとっては、渋谷の警察署の清水署長と渋谷の憲兵隊長の所へ当時の院長と同僚の教授によって拙著がその証拠として届けられ、私は共産主義学究徒として同署に召喚された。(大木金次郎「学院変遷の記」『青山学院大学新聞』一九五五年九月一日)

戦時中に弾圧された闘士という自己イメージが、戦後大

史苑(第七一卷第二号)

木の勲章となり、その力を拡大していく原動力の一つとなつたことは疑えません。

しかし、晩年になって大木自身がそのあたりについて、異なつた事情を語るようになっていきます。彼は退職の際、米山梅吉に次のように言われたとしています。

君は何故古坂君などを支持しているのか、古坂君は私の目の黒いうちは絶対に院長にはしないよ。笹森院長の話だと、学内でことごとくに古坂は笹森に反対しているそうじゃないか。笹森が言っていた、大木の古坂支持があるから、古坂が笹森に反対しているといっていたよ。(大木金次郎「日本学術新聞編集局編『私の足跡 第一巻』

これは一九八二年、彼が青山学院における権力基盤を確固たるものにした後の時期の回想ですが、ここで彼は一九四三年当時、自らが青山学院を退職することになったのは、学内対立が原因であることをはっきりと述べるようになっていきます。恐らく功なり名を遂げて、油断していたのかもしれませんが、晩年の大木は一九四三年の退職の事情について戦後初期とは異なつた語りをするようになっていたことはまちがいありません。

六、「青山学院昭和一八年事件」の経過

いずれにせよ、大木らは一九四三年三月で青山学院を退職していったわけですが、その直後から青山学院の内外では、それまで以上の騒動に見舞われることとなります。例えば、清沢淵『暗黒日記』一九四三年六月一八日の条には、次のような記述が見られます。

読売新聞社の武藤貞一という男が、ミツシヨン・スクールやキリスト教を攻撃した。ソ連においては礼拝を許し、宗教を自由に行っている。このとき国内に不和を起こそうというのか。

河村幽川の話―青山学院の高等学生がストライキを起こしかけた。笹森院長の人事があまりにキリスト教主義に傾いているというのが原因だ。これを聞いて一応止めたが、このため商学部長は心臓マヒを起こして死んだ由。

ここで名前の出てくる武藤貞一は、当時読売新聞で「日本刀」と題するコラムを連載し、連日キリスト教系学校を攻撃していました。そうした中で青山学院では学生たちが、笹森院長を「キリスト教に傾いている」などとして攻撃し、ストを起こしかけただけでなく、事態の收拾に動いた学部長が死んでしまったというものです。

暗黒日記の記述は六月に入ってからのもですが、実は学内の混乱はすでに四月に入るところから顕在化していました。その辺りの動きをもう少し詳しく見ていきたいと思います。

すでに四月に入ったところから、特高警察や憲兵が青山学院を訪れ、学内の動きを探るようになっていました。こうしたことは三月まではほとんどなかったようです。さらに四月二三日には明治大学の学生が乱入してきて、学内で暴れるなど不穏な動きが顕在化するようになります。さらに五月に入ると学生のストライキが勃発します。これが先の暗黒日記にあったストライキのことを指すものと思われます。実際には未遂に終わったとも言いますが、この件で一〇名以上の学生が渋谷警察署に拘引されるという事態となっていました。

さらに、先の武藤がコラムを書いていた読売新聞の関係者や当時朝日新聞社の幹部であった鈴木文四郎など、新聞関係者も学校をたびたび訪れるようになります。鈴木は当時、子息が青山学院に通っていたようです。そうしたことから院長に父兄会の開催などを要求しているのかとも思えます。

こうした最中の六月七日に、これも暗黒日記に出てきた高等商業学部長鶴崎久雄⑥が死去します。この鶴崎という人物は、元々は文学部の教員で英文学を専門としていたようですが、先ほど触れたように三月末でそれまで学部長を

務めていた古坂が更迭されたために、急遽高等商業学部長を務めるようになったといえます。その後今触れたようなさまざまな事態の收拾に苦慮する中で、命を縮めていったものと思われます。

このように六月に入ると、青山学院内の混乱は目を覆うばかりに激しいものとなっていきました。さらに六月八日には、事態を重く見た文部省から直接調査が入るようになりました。

ここで調査に訪れた劔木亨弘⁷は、当時文部省専門教育局監理課長を務め、高等教育機関に対する監督行政の実質的な責任者でした。なお劔木は、戦後、文部事務次官、内閣官房副長官、参議院議員、文部大臣を歴任するなど、文教族の中心的人物となっていくことになりました。

彼は一九七三年に『牛の歩み』と題する回顧録を出版していますが、この辺りのことについても言及があります。同書によると、学校関係者の密告に刺激されて、陸軍の動きが活発化していたことがわかります。私が劔木という人物はさすが官僚だなあと感心したのは、実はこの自伝では、この前後も含めて一連の事件に関する記述では固有名詞を出さずに、誰が読んでもわからないまでに話を抽象化していることです。

しかし、こうした一般向けの図書ではないところで、もう少し突っ込んだ話をしています。政治学や政治

史系の研究者が中心となって組織された内政史研究会が、一九六〇年代から七〇年代にかけて、元官僚などに活発に聞き取りを行いました。劔木に対してもインタビューを実施しています。

大手出版社から刊行された回顧録とは異なり、このインタビューは印刷製本されるものの、少数部が大学図書館などに所蔵されるだけで、一般の眼には基本的に触れるものではありません。そこで劔木は青山学院の名前を出しつつ、「それは今日ではもう忘れ去ろうとしておる大学の人はそのことをいうのはいやがっておるのです。」と述べているように、当時の青山学院内でこのことに触れるのを嫌がる人間が存在することも指摘しています。まちがいに劔木は、誰が嫌がるのかは知っていたのです。もちろん最終的には断定することはできませんが、当時、青山学院院长に加えて学校法人の理事長も兼任して学内を掌握し、その後ほどなく私大連の会長を務めるようになった実力者に対して、文教族の有力者が配慮を示すことは、非常に自然なことといえましよう。

大木金次郎は、一九四三年三月に青山学院を退職させられました。それを強いた人々も決して無傷では済まされませんでした。四月から六月まで起こった一連の混乱の中で、米山梅吉は校友会長を辞任し、さらに笹森順造も院長を辞任するに至りました。さらにこうした騒動を契機に介

入してきた陸軍の主導のもとで六月末には臨時の軍事教練の査閲が行われました。どうやら陸軍側としては、ここでいろいろ難癖をつけて青山学院を廃校に追い込む腹だったとも言われているのですが、校友で満鉄理事長や日本通運社長を歴任した国沢新兵衛^⑧が、学生生徒の先頭に立って行進したことが査閲官らの心を打ち、廃校を免れたともいわれています。この辺りの経緯については今後検討の余地が大きいのですが、少なくとも深刻な危機であったことはまちがいません。

一方、大木金次郎は一九四九年から青山学院大学商学部に教授として復職し、その後商学部長、青山学院大学長、青山学院長、学校法人青山学院理事長を歴任し、一九五〇年代後半から一九八〇年代末に至る約四〇年間にわたり、学校運営の中枢を担い続けることになりました。彼のもとで青山学院は、学部を増設したり、新たにキャンパスを設置したりするなど大きく拡大し、戦後青山学院発展の立役者とも位置付けられました。

七、おわりに

さて、このあたりで話の本筋は終りなのですが、それでは戦後の立教において、こうした拡大路線を推進したような個性的なトップが存在したかどうかについて、最後に触

れておきたいと思います。

一九五五年に立教学院院长および立教大学総長に就任した松下正寿^⑨は、その在任中に社会学部、法学部の新設、原子力研究所の開設、新座校地の取得など、拡大路線を押し進めました。一九六七年に東京都知事選挙に出馬するため退任したので、大木に比べれば在任期間はかなり短いのです。

しかし、大木のプロフィールを知った上で、松下の経歴を見て見ると、その類似性には驚かざるを得ません。

まず、大木は一九〇四年に甲府で生まれていますが、松下は一九〇一年に八戸で生まれており、ほぼ同世代に属するといえます。ちなみに松下は当初、松下ではなく亀徳正寿として生まれていますが、実兄の亀徳正臣は後に青山学院大学文学部教授を務めています。もちろんこれは偶然の一致でしょうが、最初から何やら因縁めいたものを感じさせます。

その後、両者は立教大学商学部、青山学院高等商業学部を卒業後アメリカに留学し、コロンビア大学で学位を得て帰国します。年齢や経歴が多少違うので完全には重なりませんが、ほぼ同じ時期に同じ大学で学んでいたことになりました。帰国後はそれぞれ母校で教員となりましたが、大木は一九四三年三月、松下は五月にそれぞれの学校を退職します。大木の退職の事情は今日の報告で述べたようなもの

でしたが、松下の場合はまだはつきりとはわかりませんでした。ただ、彼自身が後に自らの改革案が受け入れられなかったことをその要因に挙げてるように、それまで立教内部で繰り返されてきた内部対立が影響していた可能性は高いものと考えています。

先に触れた劔木も戦時中のキリスト教学校で軍部等からの介入や騒動のあったところは「例外なしに内部のあつれきですよ。だから内部がびしつとやっているとところはそんなことはないですね。」と回想しています。大木は一九四九年に青山学院に復職しますが、その前後の事情ははつきりしないところが少なくありません。また松下も戦後、東京裁判で補佐弁護人を務めたりしますが、一九五五年になってから、いきなり外部から院長・総長として復帰するということもなかなか唐突な印象は免れません。

このように両者とも戦前から戦後初期にかけて、奇妙なほど類似性を持つ経歴を辿ってきたことがわかります。もちろん、さまざまな事象を短絡的に結びつけるということには慎まなければなりません。

しかし、本報告でとりあげた青山学院の場合、戦時中に起こった一連の出来事は、戦前から続いてきた学内における構造的問題が、一九四三年という時点でいったん噴出し、それがあがる意味未解決のまま戦後に持ち越されたということが言うことができるでしょう。

主要人物紹介

① 米山梅吉（一八六八〜一九四六）
よねやまうめきち

江戸生まれ。東京英和学校（青山学院の前身）を経てアメリカに留学。帰国後三井銀行に入社。一九〇九年常務。一九二四年三井信託を創立し初代社長となる。のち三井合名理事、三井報恩会理事長。またロータリークラブを日本に導入。青山学院校友会会長を務め、私費で現在の青山学院初等部を設立。貴族院議員。一九四六年四月死去。

② 遠山郁三（一八七七〜一九五一）
とうやまいくぞう

一九〇二年東京帝国大学医科大学卒業。一九二六年東京帝国大学教授。一九三七年立教大学学長に就任。一九四〇年立教学院総長を兼務。一九四三年二月辞任。

③ 笹森順造（一八八六〜一九七六）
ささもりじゆんぞう

弘前生まれ。早稲田大学政治経済科卒業後、渡米しデンバー大学に留学。帰国後一時廃絶していた東奥義塾を復興し、塾長に就任。一九三九年一月青山学院院长に就任。一九四三年六月院長を辞任。一九四六年衆議院議員となり、以後国務大臣、参議院議員などを歴任。一九七六年二月死去。

④ 古坂崑城（一八八八〜一九七四）
こさかがんじょう

福島県生まれ。一九一一年青山学院高等科を卒業後、ア

戦時下のキリスト教学校（鈴木）

アメリカに留学し、コロンビア大学などに学ぶ。帰国後青山学院高等学部教授に就任。高等商業学部長などを歴任するが、一九四三年四月青山学院女子専門部長となる。一九五二年青山学院大学長、一九五六年青山学院院长、一九七一年学校法人青山学院理事長を歴任。一九七四年一月死去。

⑤ 大木金次郎（一九〇四～一九八九）

甲府市生まれ。甲府商業学校卒業後、朝鮮銀行に勤務。一九二九年に青山学院高等学部商科を卒業後、米国に留学。一九三二年、コロンビア大学で学位を取得。帰国後青山学院商科教授となる。一九四三年三月、青山学院を退職。一九四九年四月青山学院大学商学部教授に就任。一九五八年青山学院大学長に就任。一九六〇年青山学院院长を兼務。一九六九年三月に大学長を辞職し、院長専任となる。一九七二年九月学校法人青山学院理事長代理となり、一九七五年六月、理事長・院長を兼務。日本私立大学連盟会長などを歴任。一九八九年八月死去。

⑥ 鶴崎久雄（？～一九四三）

青山学院文学部教授を経て一九四三年四月、青山学院高等商業学部長に就任。一九四三年六月七日死去。

⑦ 剣木亨弘（一九〇一～一九九二）

福岡県生まれ。東京帝国大学法学部卒業後、文部省に入省。教学局思想課長、専門教育局監理課長、大学教育課長などを務める。戦後、文部事務次官、内閣官房副長官、参議院議員、文部大臣などを歴任。一九九二年一月死去。

⑧ 国沢新兵衛（一八四六～一九五三）

高知生まれ。美会神学校（青山学院の前身）などを経て、帝国大学工科大学を卒業。その後鉄道官僚となる。退職後、南満州鉄道理事長、衆議院議員、日本通運社長などを歴任。一九四三年六月、青山学院院长事務取扱に就任。一九五三年一月死去。

⑨ 松下正寿（一九〇一～一九八六）

京都に「龜徳正寿」として生まれる。その後八戸に移り、松下家の養子となり改姓。一九二二年に立教大学商学部を卒業後、米国に留学。コロンビア大学で学位を取得。帰国後立教大学商学部教授となる。一九四三年五月、立教大学を退職。その後極東国際軍事裁判補佐弁護人などを経て、一九五五年六月立教学院院长および立教大学総長に就任。一九六七年二月、東京都知事選に出馬するため、総長、院長を辞任。その後参議院議員などを務めた。

（立教大学立教学院史資料センター学術調査員）